

古田史学の会・東海

東海 の 古 代

第117号 平成22(2010)年5月

会 長：竹内 強

編集発行：事務局 〒489-0983 瀬戸市苗場町137-10

林 伸禧 〈Tel&Fax：0561-82-2140、メール：furuta_tokai@yahoo.co.jp〉

5月号代行 石田敬一 〈Tel&Fax：052-853-3373、メール：furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp〉

ホームページ：http://www.geocities.co.jp/furutashigaku_tokai

113・114・115・116号に引き続き、安本美典著の古田批判書について論評を掲載します。

安本美典著『邪馬一国はなかった』を 読んで その3

名古屋市 石田敬一

7 「数」=「五、六」

つぎに、「数」を取り上げます。

古田氏は『三國志』に出てくる「数」は、中核が「五～六」を表すとしています。「数百人」と言うときは、「約五～六百人前後」の意であり、「五、六百人」より、一段と幅をもった「概数」表現であるとされます。

この古田氏の主張に対し、安本氏は、疑問を投げかけ、191ページから197ページにかけて、“「数千里」は「五・六千里」なのか”と“中国が破裂する”という小見出しをつけて、白崎氏の主張の紹介と安本氏の主張をそれぞれ記述しています。

古田氏は白崎氏、安本氏の両氏のそれぞれの主張に対して『邪馬一国の証明』（昭和55年10月20日、角川文庫）で紙幅の許す限り再吟味するとして丁寧に反論しています。ここでは、白崎氏の説は安本氏と同様の主旨であるので割

愛し、安本氏の反論に焦点をあて批判します。安本氏の反論は195ページに、次のとおり2点にまとめられています。

(1)「魏志」東夷伝は、馬韓について、「すべてで五十余国、大国は万余家、小国は数千家、総十余万戸。」と記す。五十余国で、十余万戸であるから、小国の「数千家」の「数」は、「一、二」でいどないと、計算があわない。古田氏のように、「数」を、「五、六」とすれば、馬韓の総戸数は、小国のみで成立しているとしても、二十五万戸～三十万戸余となる。大国は「万余家」とあるから、さらに、それを上まわることとなる。十余万戸と、まったく計算があわない。

(2)『蜀志』の「先主伝」に、「(孫)権、周^{そん} 瑜^{けん}・程^{しゅう} 普^{ゆう}等水軍数万を遣わし、先主と力をあわせ、曹公と赤壁^{ていふ}に戦い、大いにこれを破り、その舟船^{そう}を焚^{せき}く。」とある。そして、「諸葛^{しよ} 亮^{かつ}伝」には、「(孫)権、大いによろこび、周瑜・程普・等水軍三万を遣わし、・・・」と、ほぼ同じ文がある。このばあい、「数」は、「三」である。

8 『魏志』東夷伝の「数」

まず、(1)の『魏志』東夷伝の「数」の事例について、古田氏は、先に紹介した『邪馬一国の証明』の192ページで反論しています。

韓^{およそ}伝に「凡 五十余国。大国万余家。小国数千

家、総十余万戸」とある。だから「数千家」が「五、六千家」ではありえない」と。この点を両氏は力説された。その理由は「五十余国」全部小国だったとしても、「十余万戸」をはるかに越えてしまうから」というのだ。一応もつともだ。だが、問題のキイは、この記述を「平均値」もしくは「全部」の意ととる点だ。この一文は“大国では万余家もあるが、小国ではせいぜい五～六千家どまり”そういう意味なのである。たとえば倭人伝に「国の大人、皆四五婦」とある。これに対比してみよう。あたかも「小国皆数千家」であるかのように、両氏は錯覚されたのである。

以上、面倒な漢文の解読にながながとおつき合いいただいた。その目的は、「(江東)方数千里」がやはり「方、約五～六千里前後」であることの証明だった。それは『三国志』の本伝も『短里』で書かれている」ことを検査する、一つの直接例だからである。そしてその結果は——。“ここにも短里あり”だった。すなわち「魏・西晋朝の短里」は、『三国志』本伝でも、用いられているのである。

安本氏の主張と古田氏の主張を計算式で表すと次のようなことになると思います。「余」は古田氏、安本氏両氏共に「4」と同等と考えておられるようですので、大国の数をX、小国の数をY、五十余国を54国、総数十余万戸を140000戸と仮定します。

安本氏の場合は、万余家の平均を14000、数千家の平均を2000とするので、次のとおりの簡単な連立方程式が成り立ちます。

$$\begin{aligned} X+Y &= 54 \\ 14000X+2000Y &= 140000 \\ X=54-Y &\text{を代入し} \\ 14000(54-Y)+2000Y &= 140000 \\ 12000Y &= 756000-140000 \\ Y=616000/12000 &\div 51 \quad X=3 \end{aligned}$$

つまり、大国3か国、小国51か国となります。

古田氏の場合は、せいぜい万余家であり最大14000ですので11000、数千家は最大6000ですので一応2000と仮定すると、

次のとおりの計算が成り立ちます。

$$\begin{aligned} X+Y &= 54 \\ 11000X+2000Y &= 140000 \\ X=54-Y &\text{を代入し} \\ 11000(54-Y)+2000Y &= 140000 \\ 9000Y &= 594000-140000 \\ Y=454000/9000 &\div 50 \quad X=4 \end{aligned}$$

つまり、大国4か国、小国50か国ということになります。家の数について、安本氏のように平均とみるか、古田氏のように最大と見るかによって、どちらの解釈も成り立つということでしょう。ただ、漢文の解釈上は古田氏に分があり、安本氏の反論は弱いと思います。

9 「戸」と「家」

古田氏は安本氏の批判に正面から応えていますが、私は安本氏の批判に同じ土俵で応えるべきではないと思います。

というのも安本氏は韓伝に出てくる「戸」と「家」を同じ単位として取り扱っています。

凡五十餘國。大國萬餘家、小國數千家、總十萬餘戸。(『三國志』韓伝。下線は石田)

「戸」と「家」が、同じ単位であれば、安本氏の主張も妥当性があるでしょう。しかし文字が明らかに異なる以上、単位も異なると考えるのが筋ではないでしょうか。

安本氏の批判は、たとえば小国の数千家をすべて六千家とすると、五十余国つまり五十四国の小国だけで計算した結果は、6000家×54国で、三十二万四千家になります。これを安本氏は三十二万四千戸と捉えて十四万戸を越えてしまうので、古田氏の主張は破綻しているとされます。

これに対して、古田氏も安本氏と同じ土俵で、「家」と「戸」を同一単位であることを前提として、安本氏に反論されています。しかし、「戸」と「家」が同じ単位であるという保証はどこにもありません。

『魏志倭人伝』では、陳寿は次の表のとおり「戸」と「家」を書き分けています。明らかに異なる単位であることを前提としているのではないのでしょうか。それを同一の単位として扱い、単純に計算する方法について、私は間違ってい

ると考えます。

國名	戸数・家数
対海國	有千餘戸
一大國	有三千許家
末盧國	有四千餘戸
伊都國	有千餘戸
奴國	有二萬餘戸
不弥國	有千餘家
投馬國	可五萬餘戸
邪馬壹國	可七萬餘戸

『魏志倭人伝』では「大人皆四五婦下戸或二三婦」とあります。大人は皆四人か五人の婦人を持ち、下戸でも二人か三人の婦人を持っているという姿が書かれています。一夫多妻制です。

アフリカの一部地域やイスラム教社会では一夫多妻が認められており、たとえば、今でも一夫多妻の風習が残っているマサイ族やルオ族は一人の男性が4, 5人の奥さんを持ち、奥さん1人に家が1軒ずつあります。こうした状況が私には『魏志倭人伝』の記述にまったく重なって映ります。

『魏志倭人伝』に書かれた一夫多妻は、大人がいわば「戸」主にあたり、その一人の「戸」主のもとに4~5の「家」がある姿であったのではないかと私には思われるのです。

つまり、私は、『魏志倭人伝』の世界は、一大國と不弥國以外の國においては、4~5の「家」で一つの「戸」とする形であったと思うのです。このように、いくつかの「家」で「戸」を構成すると考えたとき、始めて、陳寿が「戸」と「家」を書き分けた理由が理解できると思います。

この倭人の世界と似たようなことが、馬韓にも言えるのではないのでしょうか。

『三國志』馬韓伝には次のとおりあります。

其俗少綱紀、國邑雖有主帥、邑落雜居、不能善相制御。無跪拜之禮。居處作草屋土室、形如家、其戸在上、舉家共在中、無長幼男女之別。

その習俗に綱紀少なく、國邑に主帥有りとはいえども邑落雜居し、善相制御にあたわず。跪拜の礼無し。住處、草屋根の土室に作り形は家の

如し。その戸上に在り、舉家は共に中に在り。長幼男女の別なし。(読み下し、下線は石田による)

馬韓においては、住むところは草屋根で土室であり家のような形をしていて、その「戸」は上にあつて、舉家すなわち、全ての「家」族が長幼男女の別なく共にその中に住むという状況が書かれています。

実際に発掘されている加耶の住居跡は、地面を掘り下げて底を突き固め、柱を内側に倒した竪穴住居が多いようです。草葺きの屋根の場合は、地上にはほとんど屋根しか見えないので、上に「戸」があると表現されているのではないかと思います。

ここでいう「戸」は門戸のことであると思いますが、この一つの「戸」の住居の中に、家族が長幼男女の別なく共に住むという状況とは、兄弟姉妹等それぞれの夫婦家族が一緒に生活する大家族制度でしょう。一夫多妻制ではないものの、複数の「家」族で一「戸」を構成していた形態であるのではないのでしょうか。

だからこそ、『魏志韓伝』においても、『魏志倭人伝』と同様に「戸」と「家」を書き分けているのだと思います。これを誤謬とか誤写として片付けるようでは、これまでの古代史学の間違った思考方法の枠を一步も出ません。理由もなく誤謬・誤写と片付ける前に、記述どおり書き分けているという前提に立った思考をすべきです。

次に「戸」と「家」を書き分けているという前提に立ち、具体的に数値を想定して検討します。

たとえば、古田氏の主張による大國萬餘家、小國數千家を、それぞれ最大の数とした場合、大國12000戸、小國2000戸で、一つの戸が平均3家であると想定すると、

大國の数をX、小國の数をYとして、 $X+Y=54$ 國
 $11000X/3+2000Y/3=140000$
 の連立方程式となります。

$$11000(54-Y)/3+3000Y/3=140000$$

$$594000-11000Y+3000Y=420000$$

$$8000Y=174000$$

$$Y=22 \quad X=32$$

つまり大国32カ国、小国22カ国となります。

ちなみに、安本氏の設定である、大国を14000家、小国を6000家として、一つの戸が平均3家と想定した場合は、

$$\begin{aligned} & \text{大国の数をX、小国の数をYとして、} X+Y=54 \\ & 14000X/3+6000Y/3=140000 \\ & 14000(54-Y)/3+6000Y/3=140000 \\ & 756000-14000Y+6000Y=420000 \\ & 8000Y=336000 \\ & Y=42 \quad X=12 \end{aligned}$$

つまり大国12カ国、小国42カ国と言うこととなります。

このように「戸」と「家」が異なる単位であると考えて、具体的な数値を想定した場合にも成り立ちます。一つの「戸」は複数の「家」で構成されると考えた場合に、大国と小国のそれぞれが一応、理解できうる数に想定できるのです。

いろいろな計算が成り立つので、安本氏が唱えていることが正しいとはいいがたいと思います。

いずれにしても、「戸」と「家」を陳寿は書き分けており、それを同一の単位として計算するのに私は反対です。少なくとも「戸」と「家」が同一の単位であると想定するならば、なぜ同一なのかを説明する必要があると思います。何の説明もなく「戸」と「家」は当然同じものであるとして主張する安本氏の批判は納得できません。

したがって、安本氏が「数」は5～6ではないと主張される根拠として、この事例を挙げて古田氏の説を批判するのは、まったく適切ではないと思います。

10 『蜀志』先主伝の「数」

(2)の『蜀志』先主伝の「数」の事例については、古田氏が『邪馬一国の証明』の191ページでわかりやすく反論しており、また説得力がありますので、これを掲げます。

①(孫権)周瑜・程普等の水軍数万を遣わし、

……(蜀志二)

②(孫権)周瑜・程普・魯肅等の水軍三万を遣わし、

……(蜀志五)

赤壁の戦い直前の描写だ。白崎氏は①②を比べ、「数万＝三万」とされる。右の“抜き出された二文の比較”からは、一見そう見えよう。しかし②の前後の文脈を読むと、状況は一変する。ここは有名な知将、諸葛孔明が蜀(劉備)・呉(孫権)二国の軍を合して魏の曹操に当たる、その秘策を持って、孫権を説得する場面。はじめ孫権はしぶる。劉備が曹操に敗れて敗走してきた直後である上、自分(呉軍)は三万の水軍しかもっていなかったからである。ところが、孔明は「今戦士の還る者、及び関羽の水軍、精甲万人。劉琦、江夏の戦士を合すれば、亦万人を下らず」と言う。蜀に「一万プラス一万強」つまり「二万強」の水軍がある、というのだ。そしてこれを“孫権の統率下に委ねよう”と提案するのである。“虎穴に入らずんば虎児をえず”の、大胆な“懐柔”策だ。孫権は喜び、その提案をうけ入れる。そのとき孔明は言う。「今、將軍(孫権)、誠に能く猛將に命じて兵数方を統じ、上州(劉備)と協規・同力せば、操(曹操)の軍を破らんこと必せり」と。「二万強プラス三万」つまり「五万強」がこの「数万」なのである。これが①にも現れた「数万」の実体だ。これも逆に、わたしの理解を立証する。

以上、白崎氏が挙げ、安本氏が易々と同調された諸例、いずれもわたしに対する「反証」ではなかった。逆にひとつひとつ、わたしにとっての好例だったのである。

たいへん有名な場面です。『三國志』は、図書ばかりではなく、マンガや映画などのメディアでも提供されていますので、簡単にストーリーを知ることができます。最近話題の映画「レッドクリフ」の後半である「2」が放映されました。この前半の「1」の最初の方で、保有勢力を表した絵が写されます。ここには、蜀(劉備)が2万、呉(孫権)が3万の軍であることが示されます。そして二つの軍を合わせて5万の勢力であることがわかります。

なお、「数」についての古田氏の主張は、『古代は輝いていたI』(昭和59年12月10日朝日新聞社)にもあります。

たとえば、193ページから194ページでは、これらに関連して次のようにあります。

④江東に割拠す、地方数千里。～中略～
そのうえ、『史記』では「楚地」の広さを、
方五千里（楚世家、平原君伝等）
方数千里（祭沢伝、孔子世家等）
と記している。したがって、『史記』を教養の基礎とする三世紀の読者にとって、
数千里＝約五千里
という常識が存した。陳寿も同じくそれを知って④の文章を書いたものと思われる。

すなわち、秦時代の「里」と魏・西晋朝の「里」とは「約5対1」の違いを持っていたとされます。つまり「長里」と「短里」です。

また、194ページから195ページにかけては、赤壁の戦いの川幅の例を示されています。「北軍を去る二里余、同時発火す。」として揚子江中流域で北軍の魏に呉軍が火船を北軍の大船団につっこませて大勝を博した場面です。川幅が400～500mのところ、北岸に近づいて同時発火させた位置が短里であれば160～180mであり状況が一致するものの、長里であれば、900～1000mなので、川幅の倍となり現況と合わないと言われています。

11 「数」は「二、三、四」を表すのか

ところで、『邪馬一国はなかった』の192ページから193ページにかけて、白崎氏は、「数」という語は、『三国志』の中に数多く用いられている。その中で、具体的な数値を知りうる例をみれば、多くのばあい、「数」は二、三、四を表している。”と安本氏がその主張を紹介されています。

そして“『三国志』において、「五、六百人」「五、六千騎」「五、六歳」などという表現がかなり多く見られる。もし、「数」が、「五、六」に決まっているのなら、これらは、数千騎、数歳などと置き換えてもよさそうなものである。それをあえてしないのは、「数」がふつう五や六に当たらないからと考えられる。”とされます。

この言は本当でしょうか。

『三国志』魏書第三十烏丸鮮卑東夷傳におけ

る連続する「数」について調べました。

数字	出現回数	数字	出現回数
一二	0	五六	0
二三	1	六七	1
三四	1	七八	1
四五	4	八九	2

具体的な記述は、次のとおりです。

「二三」・・・1カ所

下戸或二三婦

「三四」・・・1カ所

又有侏儒國在其南人長三四尺去女王四千里

「四五」・・・4カ所

年十四五異部大人卜賁邑鈔取其外家牛羊

弁辰合二十四國大國四五千家小國

六七百家總四五萬戸

其俗國大人皆四五婦

「六七」・・・1カ所

弁辰合二十四國大國四五千家小國六七百家
總四五萬戸

「七八」・・・1カ所

其國本亦以男子王住七八十年

「八九」・・・2カ所

後鮮卑八九千騎穿代郡及馬城塞入害長吏
其人壽考或百年或八九十年

「五六」を除いて、「二三」「三四」「四五」「六七」「七八」「八九」の連続した数字は、以上のとおり一カ所以上にあります。

しかし、「五六」と連続した数字の記述はありません。白崎氏の言葉には間違いがあるようです。

これだけでは例が少ないので、次に、単数字について確認します。

白崎氏の言を逆に言えば、もし「数」が「二、三、四」に使われているのであれば、「二、三、四」の出現回数は少ないと考えられるので、念のため、一から九が出現する回数を確認しました。

次に、単数字について確認します。

もし「数」が「二、三、四」に使われているのであれば、「二、三、四」の出現回数は少ない

のではないかと思い、念のため、一から九がそれぞれ何回出現するのかを確認しました。

数字	出現回数	数字	出現回数
一	7 6	六	2 2
二	6 8	七	1 7
三	6 9	八	1 9
四	3 4	九	1 1
五	6 0	一	一

それぞれの数字を調べると、「四」はやや少ないですが、「一、二、三」と「五」には出現回数に大きな差はないようです。「六」より大きな数字は明らかに「一」から「五」までの数字に比べて出現回数は少ないように思われます。

白崎氏が唱えるような、「二、三、四」に比べて「五、六」が、かなり多く見られるとは言えないようです。

ましてや、安本氏が唱える「数」は「一、二」であろうとする主張も、「一、二」の出現回数が多いことから、「数」に「一、二」が当てはまるとは言えないようです。

なお、194ページで、安本氏は現在でも「一、二歩」のことを「数歩」ということがあるとされますが、これには頭を傾げます。

一般に「数歩」は複数の歩みのことだと思います。あくまで私のイメージですが「少数」はfewであり、「数」はsomeにあたると思います。「一歩」が「数歩」に含まれるという感覚は私には全くありません。

「少数」は「2, 3」を表すようですが、一般的に「数」は「5, 6」であると思います。

以上、白崎氏が挙げ安本氏が同調した具体的な事例、そして安本氏が自ら主張した事例は、古田氏によつて的確な反証が為されるか、事例としては相応しくないかのいずれかでありました。

12 終わりに

以上、三回に分けて、安本美典著『邪馬一國はなかった』に書かれた安本氏の主張に関して、その1では「臺」について、その2では「短里」について、そしてその3においては「数」について焦点を絞り、白崎氏が挙げ安本氏が同調した具体的な事例や、安本氏が自ら主張した事例

などを批判しました。これらの安本氏の主張は古田氏によつて的確な反証が為されるか、事例としては相応しくないかのいずれかでありました。

古田氏の反証の一部を紹介するとともに私の拙い考えを交えて確認した結果、次のことが再確認できたと思います。

- (1) 『三國志』には「邪馬壹国」「壹與」と書かれていた。
- (2) 『三國志』における距離の単位は短里であった。
- (3) 『三國志』における「数」は、中核が「五～六」を表した。

以上

4月例会報告

○ 安本美典著『邪馬一國はなかった』を読んで その2

名古屋市 石田敬一

古田氏が『三國志』版本では全て「邪馬壹国」と記述されていると確認した実証や、金石文の「壹」と「臺」の筆跡が似ていないと確認した調査についての安本氏の反論は、いずれも批判に値しない。『三國志』版本の「邪馬壹国」の調査は全数調査であるから「帰無仮説」は成立しない。

また、安本氏は『翰苑』の注に「臺與」とあるのは『三國志』に「臺與」と記述されていたからであると断定するが、それはまちがいである。『翰苑』の注を書いた雍公叡は、『翰苑』本文に「臺與」とあるのを受けたものである。本文に書かれた「臺與」については、著者である張楚金が、七世紀半ばの当時、最新の情報であった『梁書』（7世紀初め成立）や『北史』（7世紀半ば成立）に記述された「臺與」を参考に記述したと考えることが素直である。したがって、安本氏が、“当然『三國志』本文に「臺與」と書いてあった”とするのは、安本氏の思いこみであると批判した。

○ 纏向遺跡第166次調査について

知多郡阿久比町 竹内 強

平成21年11月14日と15日に桜井市教育委員会が現地説明会を行った際の資料によると、A～Dの建物のうち、一番大きなD棟は4間四方の南北19.2m×東西12.4m、床面積238.08㎡とまとめられ、3世紀中頃までの建物遺構としては国内最大の規模とされているが、遺構配置図では南北19.2m×東西6.2mの4間×2間の柱孔しか発掘されていない。規模は半分しかないことになり、大阪府和泉市にある池上曾根遺跡の大型建物遺構は東西10間×南北1間の132.48㎡であり、こちらの方が大きい。『魏志倭人伝』に書かれた樓観や城柵が纏向遺跡が発掘されておらず、卑弥呼の宮殿とするのは妥当ではないと批判した。

○ ずっと気になっていた上毛野君

名古屋市 竹口健三

『日本書紀』安閑天皇元年閏十二月條に武蔵国造とともに上毛野君の記述がある。また『豊前国志』や『豊前志』には「上毛郡」の記述がある。現在も大分県に接して福岡県内に上毛町として名残がある。さらに大分県国東市には武蔵町がある。こうしたことから上毛野君は大分の人であり、武蔵国造も関東ではないとの心証を得たとした。

○ “尾張神話”の中で考える草薙の剣

名古屋市 奥田圭祐

前回と前々回に竹内強氏が、愛知県知多市の法海寺は、天智天皇の勅命により新羅僧の道行が創建したと縁起に書かれているが、『日本書紀』では、道行は三種の神器の一つである草薙の剣を盗み出した極悪人とされており、その人が法海寺の創建者というのは不思議であると指摘された。これを受けて、尾張神話を参考にすると、大和政権は、その支配の過程でもともと尾張の草薙の剣であったものを自らのものに取り込むため、この地域の偉大な僧である道行の名前を利用したのではないかと指摘し、記紀は、草薙の剣が法海寺から20kmしか離れていない熱田社になぜ存在するかを説明するために作文したのではないかと考察した。

例会の予定

5月23日(日)名古屋市市政資料館 第5集会室

6月13日(日)名古屋市市政資料館 第5集会室

時間：午後1時30分～5時

場所：名古屋市東区白壁1丁目3番地

TEL 052-953-0051

参加料：500円(会員無料)

交通機関

- ・地下鉄名城線「市役所」駅下車、東徒歩8分
- ・名鉄瀬戸線「東大手」駅下車、南徒歩5分
- ・市バス「市政資料館南」下車、北徒歩5分
- ・ 「清水口」下車、南西徒歩8分
- ・ 「市役所」下車、東へ徒歩8分

駐車場

- ・名古屋市市政資料館：12台収容(無料)
- ・「古田史学の会」と言えば警備員が適宜誘導。

資料

- ・資料は、必ず「**20部**」を用意してください。

会員募集中

平成22(2010)年度会員を募集中です。

年会費：5,000円

4月例会に不参加の方は5月例会で納入を!

振込先:

- ・ゆうちょ銀行から振り込む場合
記号12110 番号12993951
- ・ゆうちょ銀行以外の場合
(店名)二一八 (店番)218
普通1299395

編集子から

初めてメーリングリストを作りました。

メールアドレスがある方は、ぜひ石田までお知らせください。わからないことがあれば、例会で聞いてください。

- ・5月号会報誌の編集・発行(石田敬一)
メール: furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp
Tel&Fax : 052-853-3373
- ・本会への連絡等(竹内強会長)
メール: takeuti-0565@r5.dion.ne.jp
Tel&Fax : 0569-48-0565